

自分も等しく罪を犯すもの

坂田三允(長野県看護大学)

「このミステリーがすごい! 98年版」第1位に輝くこの書は、ウィングフィールドによるフロスト警部シリーズの第2弾である。

舞台は、ロンドンから120キロほど離れた架空の地方都市デントン。ニュータウン化の途上の冴えない街である。フロスト警部が勤務する警察署は、連続婦女暴行魔の犯行に頭を悩ませている。だが、それだけにかかわっているわけにもいかない。古くて汚い公衆便所に小便にまみれた浮浪者の死体ごろがり、老人がひき逃げされ、高齢者用の住宅の住人から、どこぞのたわけ者がスポーツカーで騒音を撒き散らしていると連絡が入り、押し込み強盗事件が発生し、未成年の少女が失踪……われらがフロスト警部は眠る暇もない。

フロスト警部は、冴えないデントン市にまけず劣らず、冴えないおっさんである。その風貌はといえば、吊るし専門の安売りで買ったよれよれのスーツに薄汚れたレインコート。日焼けした顔にはそばかすが浮き、生え際はものの見事に後退している。おまけに下品な冗談を連発し、趣味の悪いエピソードをまさに適切な時に際限なく繰り返す。いきあたりばったりで、筋道立てて考えるなどということはしない。直観にたより、しばしばそれははすれるが、めげない。遅刻の常習犯で、事務的な仕事はまるでだめ。部下の残業手当での書類も遅れに遅れ、署内は暴動寸前だ。

にもかかわらず、私はフロスト警部が大好きである。なんとすれば、フロストは街の無名の人びとや、ちょっとした悪事をはたらいている

人びとのことをとてもよく知っている。そして彼らを気遣い、見守っているのだ。

性的暴行を受けたと何度も訴えてくる老婆がいる。

『医者に診せるたびに、あんたはまだ処女だと言われる。だったら、誰に強姦されたんだい。大天使ガブリエルか』

フロストの冗談はきつい。だが、あとにはこう続くのである。

——『嘘だなんて思っていないよ、ミス・ギブソン。あんたは嘘をつくような人じゃない(略)相手の男の顔を覚えているかい』『いいえ。ごめんなさい、意気地がなくて』『謝ることなんてない』とフロストはいって、彼女の手を軽く叩いた。『ほかの被害者だって、誰も相手の顔を見てないんだから』

——『ああいう頭のいかれた女には腹が立ちます。時間の無駄もいいところだ』『そんな薄情なことを言うな』フロストは穏やかな声で言った。『長いこと生きてきて、あれにまつわる経験とと言えば、お巡り相手に作り話を聞かせることしかないっていうのがどんな人生だか、考えてみろよ』

自分も人も、等しく罪を犯すものであるという認識、弱者への優しい目。だからこそ、制服組の部下はフロストを罵りつつ、フロストを慕う。組織の中で管理され、がんじがらめにされることで、私たちが失くしつつあるフロスト的なものへのなつかしさ。きっと、それが、この本が飛ぶように売れている理由の1つかもしれないと思う。▲

さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院(精神科婦長)を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

